評判カメラを俎上にのせる

ニコンF

Nikon F

Good Reputation Camera

安心感があるカメラ

非常に魅力的であり、さすがに日本光学の製品として誇るに足りる、世界第一級のペンタゴン一眼レフレックス——これがニコンFである。

焦準が容易

上部のペンタプリズムは、普通の胸高姿勢のフッドにも交換出来るところの着脱式にはなっているが（私の試用したものは一寸ぎごちない点があった）いわゆるペンタゴン型レフレックスとして使用する場合に、パラックスの修正がほとんど完全であり、理想的と思われるし、焦点板中央にあるスプリット・イメジ型の距離計は、分離と合致がどのカメラよりも明瞭になっているので、距離計連動方式のカメラ——ニコン、キャノンなどと同様の安心感で使える。いや、それどころか二重像のぼんやりしている連動距離計カメラ以上である。

標準レンズによって60センチまで焦準出来る点も有難い。

シャターが軽い

ミラーを動かし、自動絞の羽根の運動があり、それと同時にシャターが開閉する一眼レフレックスでは、ショック防止とシャター音を小さくするために並々ならぬ苦労をするわけであるが、ニコンFではレフレックスカメラとは思えない軽さがあり、音も低い。シャター幕はごく薄いチタニウム金属幕シャターにしており、シャターそのものの感じはニコンと変らない。

ミラーは「まばたき」型であるから、撮影の前後とも下に降りているので焦点板の画像は消えない、つまり撮影の瞬間だけ上っているわけである。ミラーが上ったところにはフォームラバーのクッションを貼りつけてあるから、これが消音の役目をしているものと思われる。

フィルムとシャターを巻上げる場合にも、余計な音は少しもしないので、この点でもニコン、ライカを使うのと変りはない。したがって、このカメラならば劇場などでも安心して使えよう。

シャターボタンなど

一軸不回転のシャターはニコンそのまま

レンズ上部に見える突起はライトメーターと絞を連結させるためで絞目盛だけ移動する

巻上レバーは1回転、その中央に自動復元のカウンターがある。その下の20と36の数字はフィルムの長さを記録するため

巻戻しレバーの座はスライド式のシューになっており、専用ガンによればコードはいらない。ドイツ型のターミナルもある

で、TBから1/1000秒までで、もはやこのシャターは定評のあるもの。ただしシャター・ボタンの位置は不自然に指を曲げなければ押せないほど後退している。ちょうどM3以前のライカと同じ位置であるが、ボディがライカよりも厚いために一層押しにくくなっている。

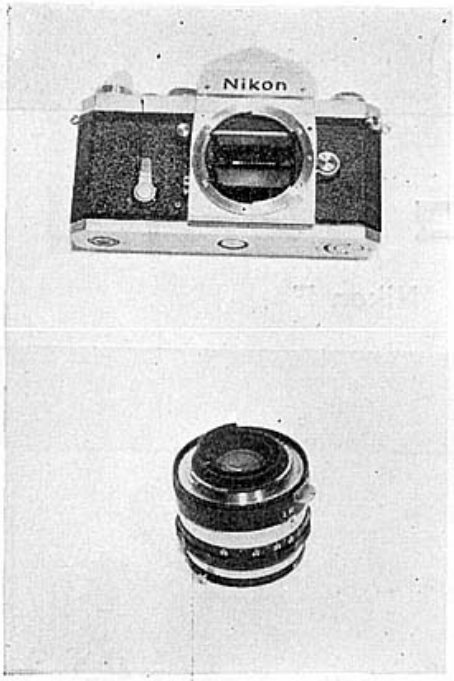
フィルム巻戻しはこのボディ・レリーズの周りにあるリングをAからRに回しておかなければならない。これは良いとして、巻戻しの終った後にはふたたびRからAに回す。ライカM3などのカメラではこの必要がないのであるから、細かなことではあるが、ボディ・レリーズの位置とともに、ニコンFクラスの高級機に対しては今後の改良が望ましい。

完全自動絞とレンズの着脱

28ミリから135ミリまでは完全自動絞のレンズになっている。一眼レフレックスが急速に普及したのは、ペンタプリズムによる上下左右の正像と、絞の完全自動化の二つがあるといえようから、今日では一つの常識になっているのであるが、ニコンFのそれも申し分のないものである。

レンズのマウントは約46ミリ、メカニカル・バックを45ミリほどにしているので、エキザクタなどに比較して、容易に大口径長焦点レンズをつけられるのは特長であろう。とはいってもレンズ自体の容積の関係で、F1.4とか1.1レンズは余程特殊な設計が完成しないと取付けられないのであって、これは一眼レフレックス共通の欠点(?)。

着脱はバヨネット・マウントに左回しで取付け、右回しで外す。回転角は約90度。



バヨネット座とレンズ背面

ニコンメーター

ボディ前面にとりつけてシャター・スピードにも絞にも、双方に連動するニコンメーターが用意されることも特長であって、シャター・スピードにしか連動しないライカM3その他に比較して、一つの前進であろう。

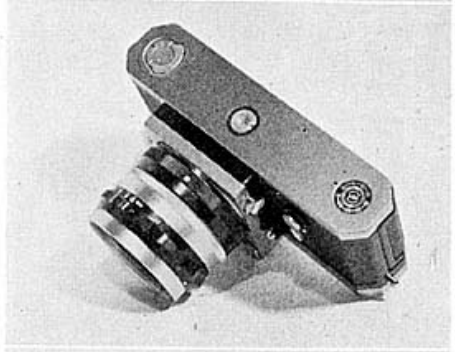
しかし、一方にはベサマチック、コンタフレックス新型、その他のように、メーターの指針をファインダーの中で見られるような一眼レフレックスも作られているのであるから、この点も将来に残された問題であろう。

ニコンFの良さ

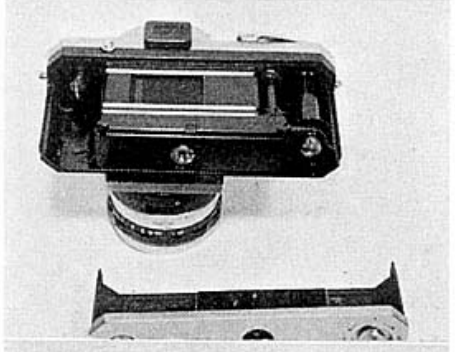
以上の諸点で主なところはいい尽したが、この他にもニコンの持つ特長はそのままそっくりニコンFにも見られるのであり、さらにワンアクションと巻上レバーなどの一切がカメラの上部にあり、底にも開閉のつまみと三脚孔があるだけであるから、三脚上の撮影の多い一眼レフレックスとしては誠に都合が良い。もし、これにクイックセット式の三脚着脱装置があればさらに便利であろう。(現在のままではフィルム交換の際に三脚を取らなければならない)

21ミリから500ミリのレンズ群、蛇腹装置などの完備していること、日本光学のレンズであることなども信頼度を高めている。

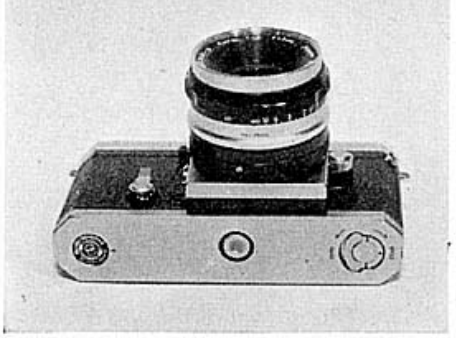
ペンタプリズムを外したニコンF



カメラ底面、中央は三脚孔。ボディの中央右下にあるボタンはミラーを固定するため



フィルム面などはニコンと同じ、裏蓋はコンタックス同様に外れる



写真の右上方のボタンは手動絞用で、焦点深度を見るために使う

ニコンF用交換レンズ

レンズ	最小絞(f)	絞調節	画角(度)	最近接距離 cm
ニッコール21ミリF 4	16	普通絞	92	90
〃 28ミリF3.5	16	自動絞	74	60
〃 35ミリF2.8	16	〃	62	30
〃 50ミリF 2	16	〃	46	60
〃 105ミリF2.5	22	〃	23	120
〃 135ミリF3.5	22	〃	18	150
〃 180ミリF2.5	32	プリセット	15.3	200
〃 250ミリF 4	32	〃	10	300
〃 350ミリF4.5	22		7	400
〃 500ミリF 5	45	プリセット	5	800

ニコンFをテストする

7月号にキヤノンフレックスを記して、また引続きニコンFの結果を書きながら昭和10年頃のことを思い出しました。当時ライカのライバルとしてコンタックスが登場、このカメラを見たわれわれは、大いに論じ合ったものです。今日日本の35ミリカメラの代表メーカーであり、良きライバルであるキヤノンと日本光学とが時を同じくして一眼レフを発表したことは、いかに一眼レフブームとはいえおもしろいことです。

ニコンFを前にして、私は今までのニコンを別に考えたい、そしてキヤノンフレックスを頭に思い浮べてニコンFのテスト結果を書きたいと思います。

ニコンFによる接写
標準レンズでは60センチまで近づける。パララックスがないので正しく画面に入れられるのも特長

北野 邦雄

■ユニークなデザイン

まずデザインですが、ニコンFを別に考えてとはいいながら、ニコンFはやはりニコンです。レチナⅢCとレチナレフのごとく、ニコンをペンタ式に一眼レフにした感じです。

ちょっとごつく、ボディの大きさにくらべてペンタ部分の大きさがアンバランスな様子ですが、塗り、皮ばり等はキヤノンのほうがやわらかな感じで、良く出来ていると思います。

■ミラーと絞機構について

クイックリターン式ミラーは、キヤノンのごとく上りきる直前に減速ギアを使用しておりません。しかし、これにかわる金具が付いております。一眼レフは、ほとんどのカメラがシャター・ボタンを押し、ミラーをはね上げてミラー自体がシャター作動金具をつけるようになっているのですが、この点ニコンFはすぐれた設計をしています。キヤノンフレックスの場合は、ミラーのはね上り減速ギアを使用していることは前にのべた通りですが、ニコンFはキヤノンフレックスの減速ギアの部分にバネ付きの金具が入っており、この金具がミラーの減速を兼ね、カメラ低部にあるシャターのメイシャフトの止メ金具を外し、ミラーが

絞リングをセットすると、○の爪が下がる。カメラにレンズが取付けられると上に押上げられ、ミラーがはね上り始めると、セットした値の絞が得られる